

和歌山

乳がん遺児 心の支えに

乳がんで母親を亡くした子どもを支援する「プレストキッズ・スマイル」が13日、発足した。発起人は和歌山市和歌浦西1丁目、精神対話士の岡本久子さん(59)で、自身も乳がん患者だった。「同じ思いを抱える子どもや親たちが集まることで、心強さを感じてもらえれば」と話している。

(宮崎亮)

岡本さんが乳がんの手術を受けたのは38歳の時。術後初めて、当時小学2年生だった娘と温泉に行ったとき、脱衣所で娘が「お母さん、早く服を脱いで。私ここに立ってるから」と体を隠してくれたことが忘れられない。「ああ、この子のために絶対生き抜かなあかん」と強く思った。

プレストキッズ・スマイル



「プレストキッズ・スマイル」発足会で、参加者と語り合う岡本久子さん=和歌山市小松原通1丁目

元患者の岡本さんが発起人

イアのカウンセラーとして働き始めた。精神対話士の資格も取得した。亡くなった乳がん患者の女性が生前、「子どもには幸せにな

ってほしい」と繰り返し言っていた。「自分の子どもは私が元氣になったからよかったけど…子供たちは、だれかが守ってあげないといけない」との思いを強くした。

発足会はこの日、和歌山市小松原通1丁目の県民文化会館で開かれた。乳がんを患っている女性や、手術を経験した女性ら4人が参加した。

体験持ち寄り共感の輪

近く乳がんの手術を控える50代の女性は「自分以上に息子が動揺していた。息子にどう説明したらいいの?」と打ち明けた。昨年手術したという女性は「息子は『定期検査受けなよ』とだけしか言わないが、その裏ですごく心配させていたんだなと思う」と話した。今回、子どもも参加はなかったが、母親たちは子どもに病気を説明する難しさや病気のつきあい方などを話し合っていた。

岡本さんも「女性として乳房を失うのはとてもつらいこと。その上、家族に言えない悩みもある。つらさを隠そうと、作り笑いをすることもよくありました」となどと、自らの経験を交えて参加者と語り合った。

「プレストキッズ・スマイル」は今後も少なくとも年1回は集まりを持つという。また、岡本さんは毎週月曜の午前10時から午後4時までの電話相談(073・445・8873)も続けていくという。